

関西中央高等学校 平成30(2018)年度 学校評価報告書

関西中央高等学校
学校評価委員会

1 本校の概要

(1)沿革

昭和39(1964)年4月に、桜井女子高等学校として現在の地(奈良県桜井市桜井502番地)に開校し、53年を迎えた。平成11(1999)年4月に、関西中央高等学校に校名変更を行い、特進コースを男女共学(平成15(2003)年全コースで共学)とした。開校以来、課程、コース等の変遷を経て、平成29(2017)年4月より、普通科特別進学コース・進学コースの2コース(3年生は、普通科特別進学コース・表現情報コース・スタンダードコースの3コース)となった。

(2)基本理念、基本方針

基本理念 建学の精神「徳をのばす、知をみがく、美をつくる」に基づく人格形成
基本方針 「学ぶ力」をのばし、「生きる力」をみがく

2 今年度の重点目標における取組計画、自己評価、改善方策

自己評価の目安 S:大幅達成 A:達成 B:未達成 C:大幅未達成

(1) 重点目標① 生徒が主体的に学び考える力をのばす。

取組計画	自己評価	取組状況・達成状況	今後の改善方策
学習評価の観点を示し、目標を明確にした学習環境を構築する。	A	評価の観点については方向性が定まってきた。学習環境の構築準備は進んでいる。特に勉強倶楽部教室へのノートPCの設置により、ネット教材の視聴環境が整った。	学習環境の構築(ハード面)は当然であるが、生徒が主体的に学びたいと思う意欲がわく取り組み(ソフト面)を系統的な教育システムを学園全体のサポートを受けながら構築していくことをめざす。
生徒の志望実現のために進路指導部と連携し学力向上のための方策を立案し実施していく。	A	全教員による研究授業の実施(畿央大学教育学部教員によるフォローアップあり)や外部講師による進路講演など生徒の学力向上に役立つ方策を実施している。	

(2) 重点目標② 成績不振者補講の充実に努める。

取組計画	自己評価	取組状況・達成状況	今後の改善方策
定期考査前後における学習指導時間の確保と理解を促す指導内容の充実を図る。	A	指導時間を確保し、充実した補習体制にて運営できつつある。更なる体制の充実を進めていく。	時間の確保だけではなく、内容の充実をさらに図ることをめざす。

(3) 重点目標③ 安全管理の徹底

取組計画	自己評価	取組状況・達成状況	今後の改善方策
各施設・教室に「非常災害時避難経路図」を提示し、HR等で非常災害時の対応方法を確認する。	A	安心・安全な学校運営をするため、学校全体で内容を確認し、取り組んでいる。同窓会館建設にあわせて、安全管理体制の見直しを行なう。	社会的意識の変化に対応し、安心・安全な学校であることを意識しながら、安全管理を行なっていく。
「震災放送」「講演」「防災訓練」等を通して、危機管理意識の高揚を図る。	A	例年通り11月下旬に「避難訓練」を実施。また1月中旬には「震災放送」を実施し、生徒だけでなく教職員も含めた防災意識の高揚を図る。台風による計画運休への対応など新たな危機管理への対応を検討していく。	

(4) 重点目標④ 生徒ひとりひとりの希望進路を保証するためのサポートを行なう。進路ガイダンスや進路行事を通じて生徒の進路選択を促すとともに、生徒の到達学力および進路希望を把握し、その実現へ向けて適切なアドバイスを行なう。

取組計画	自己評価	取組状況・達成状況	今後の改善方策
1年次から3年次までをトータルに捉え、それぞれの学年の適切な時期にキャリアガイダンス、進路ガイダンスを行なう。また、個別の学校説明会や大学・専門学校見学ツアーを実施する中で、ひとりひとりにあった学校説明を行い進路選択の指針を与える。	A	1年生「分野別ガイダンス」、2年生「学問分野別ミニ講義(出張講義)」、3年生「学校別ガイダンス」を生徒の希望にできるだけ沿う形で実施。学年別の進路講演会において、個々の進路に関する意識を高めることができた。	早い段階で自身の夢や希望が明確になるようにさまざまな機会を持てるような取り組みを行なう。

(5) 重点目標⑤ 「命の尊さ」を認識させる。

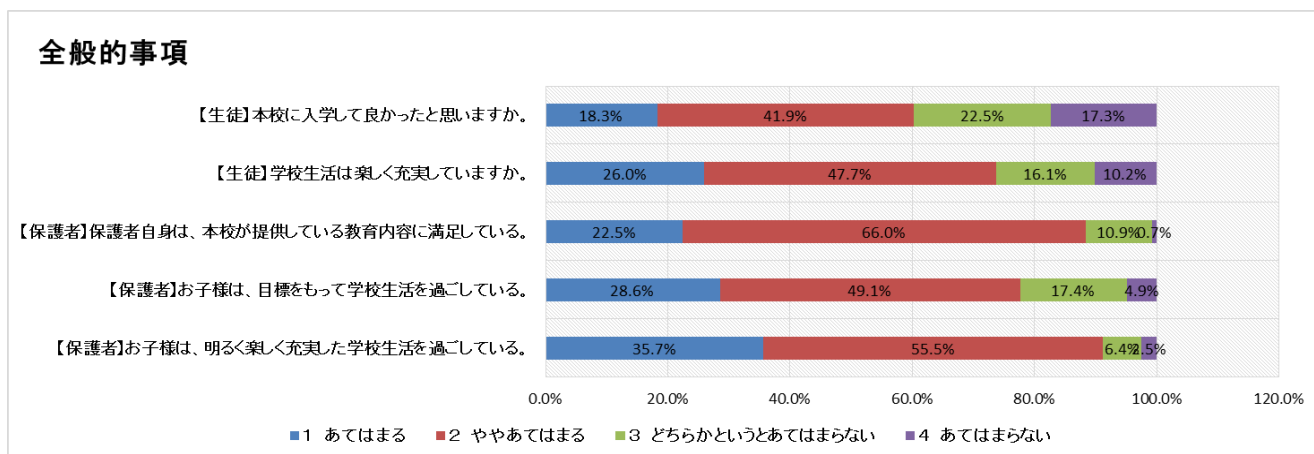
取組計画	自己評価	取組状況・達成状況	今後の改善方策
人権教育講演会や人権教育ホームルームの充実を図り、積極的に参加し、実践できる内容を構築し展開する。	A	「命の大切さを考える」をテーマに掲げ、外部講師を招聘し、1学期末考査最終日に講演会を実施した。また例年同様、各学年のテーマに沿って参加型を取り入れた人権教育ホームルームの充実を図った。	人権や命の大切さについての意識を身につけて、本校を卒業することを意識して内容の構築をめざす。教職員の研修にも注力する。

3 アンケートの実施状況について

学校評価委員会において、昨年度より、例年行っている保護者アンケートに加え、保護者アンケートと関連性を持たせた内容で生徒アンケートを実施している。保護者アンケートは、平成30年7月に実施し、生徒アンケートは同10月に実施した。双方の結果を対照させた簡単な分析を以下に示す。

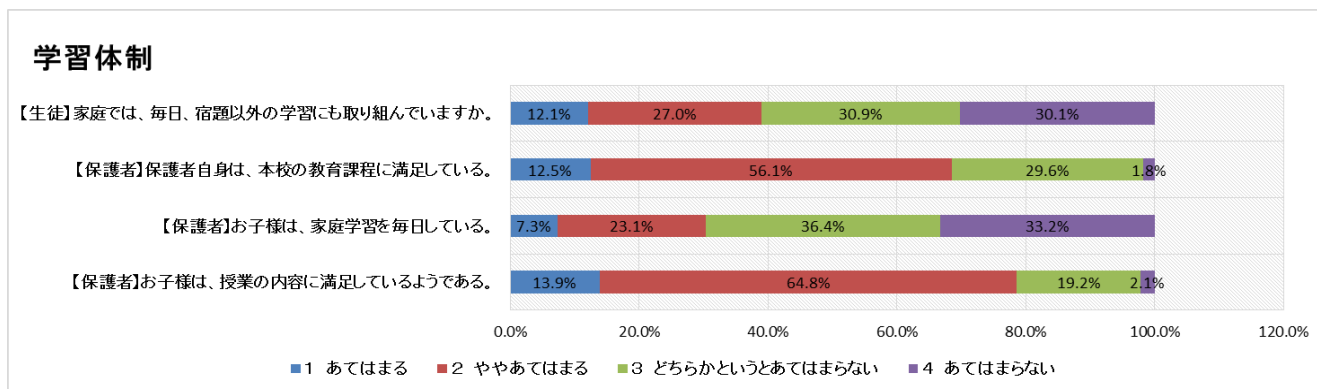
(1) 全般的事項

生徒の約7割は本校の学校生活を充実感を持って過ごしており、9割以上の保護者も生徒の充実感を共有している。また、約9割の保護者は、本校の教育内容に満足している。ただ、全般的にややあてはまるという回答のウエイトが高い。また充実感を持っていない生徒や満足されていない保護者が一定数おられることから更なる改善努力が求められると考える。



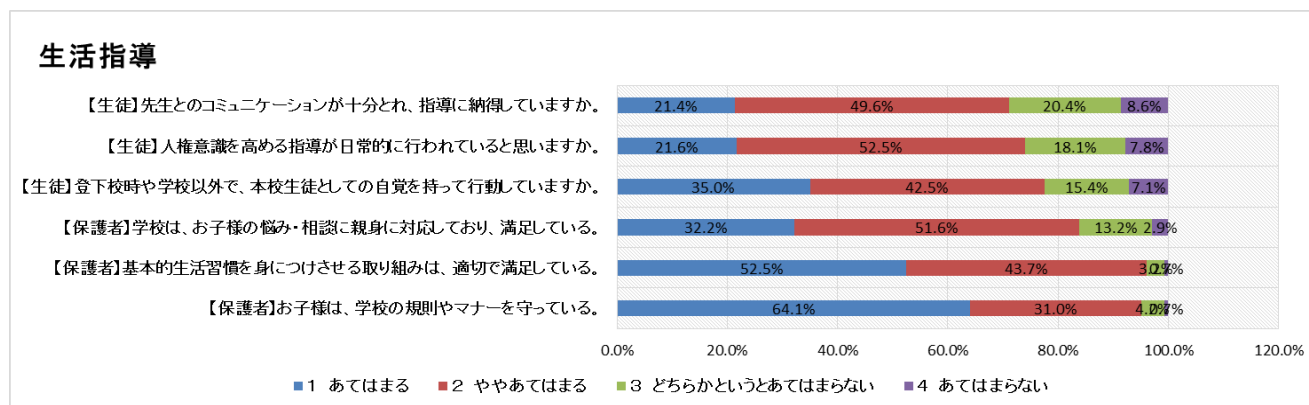
(2) 学習体制

保護者の約8割は生徒が授業内容に満足していると感じている。毎日の家庭学習に関し、生徒自身も保護者も出来ていないことを認識しており、家庭学習の重要性の理解と、自発的に取り組む姿勢を醸成する必要がある。放課後の本学での取り組みの充実や部活動等課外活動とのバランスを自律的に取れるように指導する等、学ぶ力を伸ばすことへの対応をさらに進める。



(3) 生活指導

生徒の約7割は、教員との良い関係性が保たれており、本校生徒としての自覚を持って行動している。保護者のほとんどは、本校の生徒に基本的な生活習慣を身につけさせる取組みに関し評価しており、生徒が規則・マナーを守っていることを確認している。約3割の教員とコミュニケーションが取れていないと感じている生徒を、さらに個別対応を重ねることで改善していく努力が必要である。また、人権意識を高める指導が多少認識されていないようなので、指導の意味をきちんと伝えることも必要である。



(4) 諸活動

生徒は、学校への満足感や教員とのコミュニケーションと比較して、教員の適切な対応に関して多少厳しく評価している。何が適切と評価されるかは難しい問題であるが、少なくとも生徒が納得できる対応をそれぞれの教職員が意識する必要がある。事故・災害対応も、訓練は毎年度実施しているが、もう一歩踏み込んだ指導の必要性が見て取れる。勉強と部活動の両立は簡単にはいかないが、「学ぶ力をのばし生きる力をみがく」上で非常に重要なテーマであると認識する。様々な手立てで、生徒の勉強と部活動の両立をサポートしたいと考えている。

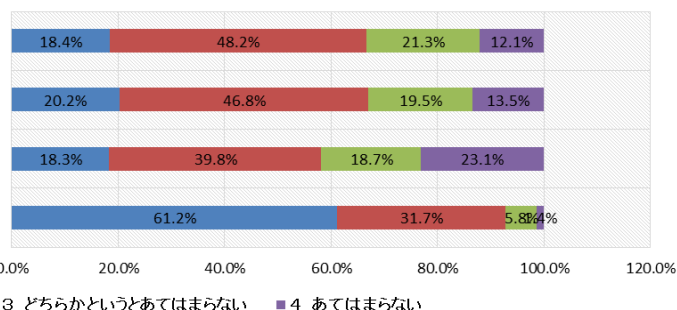
諸活動

【生徒】先生は学校生活での色々な問題に、適切な対応をしていると思いますか。

【生徒】事故、災害等の際の行動について指導を受けていますか。

【保護者】お子様は、勉強と部活動の両立ができていますか。

【保護者】お子様は、スポーツ大会、文化祭等の学校行事に積極的に参加できていますか。



(5) 学校環境

約3.5割の生徒が、困った時に相談する教員がいないということは問題と考え、教員の相談対応について新たな制度を検討する。また本校の学習活動のための施設に関して半数近くの生徒は不十分と考えている。教育施設・設備の改善検討を行うことが必要である。

学校環境

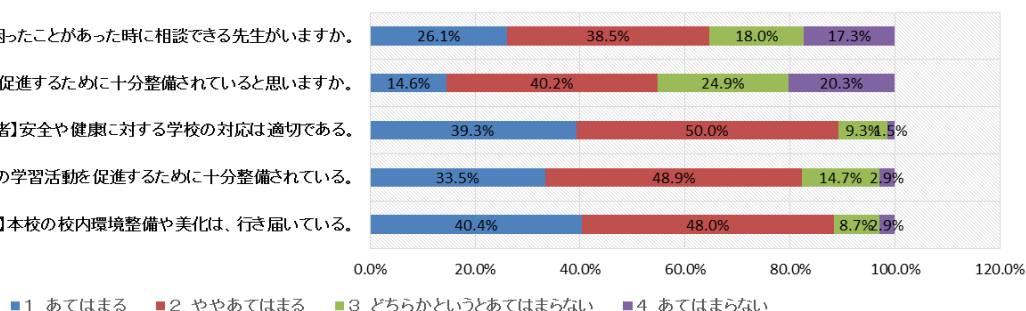
【生徒】困ったことがあった時に相談できる先生がいますか。

【生徒】本校の施設は、学習活動を促進するために十分整備されていると思いますか。

【保護者】安全や健康に対する学校の対応は適切である。

【保護者】本校の施設・設備は、生徒の学習活動を促進するために十分整備されている。

【保護者】本校の校内環境整備や美化は、行き届いている。



(6) 学校との連携

保護者の学校諸活動への参加の困難さが見て取れる。それでも無理をして積極的に協力頂いていることに感謝する。本校のホームページに関しての活用度合いはいま一つであるが、視覚情報も含めタイムリーに本校の事を伝達できることのメリットは大きいと考えられるので、保護者だけではなく一般の方々に見て頂ける工夫が大切である。

学校との連携

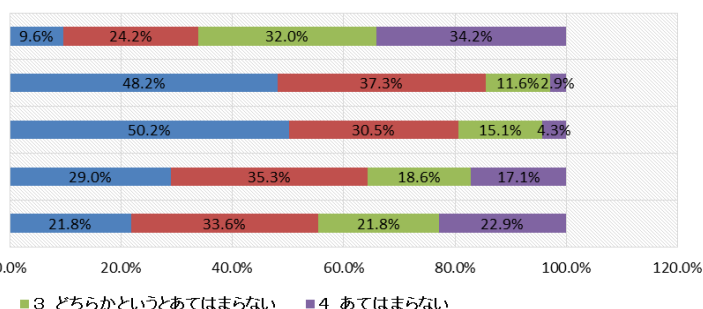
【保護者】保護者自身は、育友会活動や学校行事等に積極的に参加している。

【保護者】学校からの連絡(文書、電話等)は、必要に応じて適切に行われている。

【保護者】お子様を通じてお渡ししている保護者宛文書は、お手元に届いている。

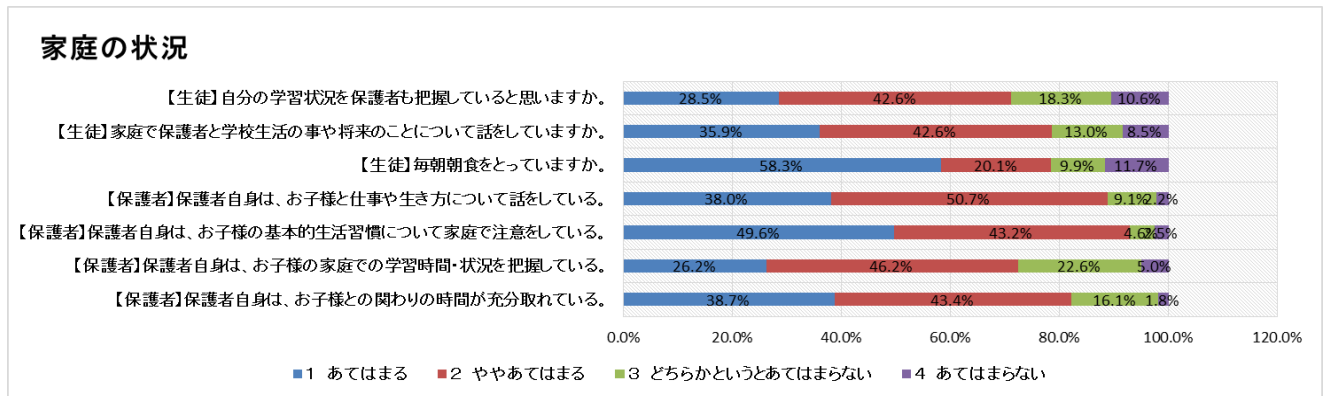
【保護者】保護者自身は、ホームページで配信される情報は、役に立っている。

【保護者】保護者自身は、本校のホームページを定期的に閲覧している。



(7) 家庭の状況

家庭での生徒と保護者の関係は、おおむね良好であると推察される。



(8) 全体として

どのアンケート項目でも、ほぼ2割前後のネガティブ意見が見て取れる。それらの相関関係や、実態について個別のコミュニケーションを手段としてきちんと把握、分析し、その情報を問題のない方法で学内共有し、「チーム学校」という意識で対応に当たり、学校運営を改善していく。アンケートについては継続的に実施し、状態をモニタリングする。

4 学校関係者評価委員会からの評価結果について

平成30年12月20日に学校関係者評価委員会が開催され、下記の審議等がされた。

冒頭、文部科学省のガイドラインに沿った「学校評価」について説明がされ、本校の学校評価委員会において決定された今年度の「学校評価」の進め方が説明された。その「学校評価」に「学校関係者評価委員会」が関与する趣旨、関与方法等について説明がされ、出席委員全員で共有された。

当初の予定は、校舎の見学をする予定であったが、悪天候のため、会議終了後、今年度新しく張り替えたテニスコート、進路指導室、職員室、本館ホール、現在、建設中の蘭友会館など主要な場所を見学することとした(終了後、実施)。隣のホールで吹奏楽部の生徒が自主練習をしていたので、出席委員がそこに移動し、練習風景の見学及び生徒たちとの対話を行い、生徒の様子を確認した。

その後、校長より、学園の創設者である冬木智子名誉学園長の資料により、学園の建学の精神とその理念を掲げ連携と教育を続けてきた教育の根底の考え方と、資料5に基づき、現在の本校の取組みに関し、具体的に説明された。

事務局より、資料6.7に基づき、今年度の5項目の重点目標とその目標を設定した方法等が説明され、項目ごとの取組み計画、自己評価、取組状況・達成状況及び今後の改善方策について説明され、合わせて生徒と保護者へのアンケートの集計結果が説明された。その上で評価に関し、意見交換が行われた。

- ・大学進学体制にあわせた改革(体育祭、文化祭の前倒し等)の説明があったが、さらに大学進学実績をあげるなら、公募推薦入試の前に3年間の履修内容が終わるような教育課程とすることはできないか。
- ・自習用コンピュータの教室導入などのハード面の整備はありがたい。更なる要望としては、生徒たちがどうすれば活用したくなるかを検討いただきたい。
- ・保護者への情報提供、フォロー、声かけをやっていただいていると思うが、さらに保護者をいかに巻き込むかを考えて対応して欲しい。
- ・子どもは公立高校に不合格で本校に入学したが、卒業する時には将来の夢を描くことができ、大学に入学でき、ありがとうございます。
- ・創設期の卒業生としては、いろいろな取組みを実施されていることをすごいと思う。あと自分たちの時には、教員から授業を受けるだけでなく、放課後は互いに教え合うようなことをしていたことを記憶している。
- ・共働き世帯の割合も多いと思うので、学校での放課後学習支援の充実が、保護者の負担減少に役立つのではないと思う。あと生徒の育成には保護者と学校の協力は不可欠である。
- ・地域の商店街活性化等の取組みに生徒が参加して、非常に良いアクティブラーニングの活動が行われている。
- ・緊急時の情報発信については、更なる工夫が必要だと思う。

以上の意見をまとめて、「学校関係者評価」とすることが承認された。

(6) 学校関係者評価委員会委員名簿

辻 敬三 育友会会長
眞鍋 愛子 桜友会(育友会OB会)会長
萩元満知子 蘭友会(同窓会)会長
小西宗日出 桜井市本町通周辺まちづくり協議会会長
深田 将揮 畿央大学教育学部准教授
植村 豊 学校法人冬木学園 法人事務局長
西川 隆彰 関西中央高等学校 校長

5 校長の意見書

「学ぶ力」「生きる力」を育む特色ある学習指導の取組の一つとして従来行っていた「校内合宿教育」は、昨年度から「アクティブ・ラーニング実践教育」として、合宿という形式をなくし、全学年が同一日に終日かけて一斉に行うように変更した。この行事は学年ごとのテーマに則り、三段論法や三角ロジック、ディベートなどを行うことで、生徒が主体的・対話的で深い学びに接する機会となっている。また、一部の教員から全ての担任・副担任が関わる体制となったことは意義深く、本校の特色ある取組として継続する。

教員の研究授業は例年新任などの若手教員が行っていたが、今年度は若手もベテランも含め全ての教員が「アクティブ・ラーニング」を念頭においた各教科ごとの研究授業を実施した。全員実施は本校にとって初めてで画期的なことであり、次年度以降継続定着を図る。

毎週ははじめの朝のSHR(ショートホームルーム)や月一回の全校朝礼での「創設の心の唱和」、「思いやりの心・マナーアップ運動」における標語の募集と校内掲示、登下校時の校門一礼、元気な挨拶運動などの取組を通して、社会人となるための基本的な生活習慣の確立や規範意識の向上を図っている。生徒に対する指導票はかつて年間450枚ぐらいあったが、昨年度は183枚に、今年度は115枚と減ってきており、落ち着いて学べる環境になってきていると実感している。もちろん、全ての生徒ができていないわけではないので、根気よく粘り強くこの取組を続ける。

全国模試は特進コース生は全員受験している。進学コース生の受験はほとんどなかったもので、昨年度から進学コースの生徒も積極的に受けるように呼びかけ、とりわけ、進学コースから特進コースに転コースを希望する生徒には全国模試の受験を義務付けた。この全国模試の結果を受け昨年度は1名の生徒が特進コース替えとなった。今年度は2名の生徒がコース替えを認められる状況にある。向学心の向上のためにも、今後も全国模試の受験を大いに勧めていきたい。

大学進学率は進学コースにおいても62%となり、大学進学に照準を合わせた改革として、秋に行っていた体育祭を6月に行い、文化祭も8月下旬に前倒しするなど学校行事を見直し、受験に向けた体制を整えた。

海外への修学旅行の行き先は費用面も鑑みてグアムとなり、今回は2回目であった。前回と大きく異なったのはグアムの現地高校と交流ができたことにある。国を越えた高校生同士の交流は生徒のアンケート結果にもあるように充実感が得られ、満足できるものであった。J・Fケネディ高校とは姉妹校として良好な関係を維持し、今後も交流を継続する。

授業改善や生徒理解に役立てることなどを目的として、現在、教員は「自己啓発シート」を年3回提出している。また、生徒による「授業アンケート」は年2回とり、その結果を教員に返し、教員は生徒からのアンケートに基づく改善方策を「授業アンケート自己評価シート」に記入し提出している。生徒に対しては「悩みのアンケート」を年2回、「いじめのアンケート」を年1回とっている。更にはカウンセラーとの連携が重要であり、男性と女性のカウンセラーを週2回配置している。女子生徒にとっても相談しやすいとのことで今後も継続する。

建学の精神である「徳をのばす、知をみがく、美をつくる」に基づく人格形成を図るとともに、関西中央高校刷新計画に基づくベクトルに沿った取組を今後も積極的に進めていきたい。